

芦屋大学論叢 第74号  
(令和3年3月22日)抜刷

## 森のようちえんの子どもたちの生活習慣と学びに向かう力

—保護者アンケートによる既存園との比較より—

大 谷 彰 子



# 森のようちえんの子どもたちの生活習慣と学びに向かう力

—保護者アンケートによる既存園との比較より—

大谷 彰子

## 1.問題と目的

本稿は、日常型森のようちえんに通う子どもたちの家庭での生活習慣と学びに向かう力の特性を既存園の子どもと比較することで、明らかにすることを目的とする。

わが国では、幼少期の自然体験が減少傾向にある（高橋ら 2009）が、倉橋惣三は著書のなかで、「森の幼稚園」という用語を用い「自然物ほど幼児の全心性に円満な効果を与えるものはない」と子どもたちの育ちにおける自然環境の重要性を説いている。また、幼稚園教育要領（2018）には、領域「環境」に「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われる」と記載されているように、自然環境を活かし子どもたちの直接体験を重視する自然保育は、保育の独自性を支える一つの基盤となるものである。リチャード・ルーヴ（2006）は、子どもたちが安心して夢中になって自然体験する機会が減少することで「自然欠乏症候群」を引き起こし、集中力、落ち着き、忍耐力、他人に対する気遣いなどの非認知能力の低下に繋がっていると警鐘を鳴らし、欧米諸国で幼児期の自然体験への注目が高まるきっかけとなった。

その自然環境の中で保育を行う森の幼稚園は、スウェーデン、デンマークに端を発し、ドイツ、北欧などに留まらず世界中に拡がりを見せている。「森の幼稚園における教育（人格形成）とは、感覚や意味の関連の中で、探求しながら学ぶこと」（イングリッド・ミクリッツ 2018）である。絶え間ない変化を見せる多彩な刺激の自然の中で、子どもたちは自ら試し、責任を伴う限界体験をし、友だちと共鳴するなどの多様な経験を自分のものとする中で日々成長している。我が国でも、母親たちの自主保育から広がってきた森のようちえんは、自然保育の重要性の認知の高まりと、保護者の保育ニーズや価値観の多様化を背景に、2021年1月現在NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟に登録されている団体が大小合わせて249団体と増加している。「自然体験活動を基軸にした子育て・保育、乳児・幼少期教育」（前述の連盟による定義）を行うことを目的とした森のようちえんは、日本では国の基準に合致する園舎を持たないなどの理由で認可を受け入れられず、NPO法人や認可外保育施設として活動している園が多い（木戸 2015）。既存の認可幼稚園・保育所が、我が国の「正統」な幼児教育・保育であると認められてきたのに対し、「森のようちえん」はあくまでも既存園の「オルタナティブ」として、私的な家庭教育の延長上にあるとされてきた（山口 2016）。

これまでの森のようちえんに関する先行研究では、ドイツなど海外の「森の幼稚園」に関するもの（岡部 2007, 今村・水谷 2011, 木戸 2013）、森のようちえんの幼児教育の方法論に関するもの（菊田 2016）森のようちえんを運営する特定の団体の保育実践を取り上げたもの（大平 2008, 水谷・今村 2014）、保育理念を整理し分析したもの（今村 2011, 杉山 2013, 藁谷他 2016）、自然環境における子どもたちの育ちに関するもの（吉田・宮本 2008, 梶浦他 2017）、自然環境が保育実践に与える影響に関するもの（中坪他 2011）、県

註）森のようちえんの表記については、海外の園は「森の幼稚園」、日本の園は「森のようちえん」とひらがな表記とした。理由として、ドイツの「Wald Kindergarten」は一般的に「森の幼稚園」と翻訳されていること、日本では、認可幼稚園だけでなく、保育園、託児所、学童保育、自主保育、自然学校、育児サークル等を含んだ乳児・幼少期の子ども達が集団で活動する場の総称であることからひらがなの「森のようちえん」という表記とした。

独自の認証制度に関するもの（山口 2016, 2017）など、森のようちえん自体を対象とした研究や自然環境での保育を通した子どもの育ちに関する研究が多く行われている。一方で、既存園との子どもの育ちを客観的に比較した研究は少なく、自然環境での保育の活動時間、頻度についてもほとんど検証がなされていない。未だ国が認める公教育・保育となりえていない多くの「森のようちえん」に通う子どもたちにとって、子どもの育ちを明らかにし、多様な保育の可能性を示唆することは、森のようちえんが一つの保育のスタイルとして社会的に認知され、そこに通う子どもの権利が保障されるために意義があると考えられる。

そこで本稿では、森のようちえんに子どもを通園させている保護者を対象に質問紙調査をおこない、既存園の子どもとの育ちと比較することで、森のようちえんの子どもたちの生活習慣と学びに向かう力の特性を検証する。

## 2. 方法

### 2.1 対象者

森のようちえん（12園）「森のようちえん さんぼみち」「森のようちえん はっぴー」「Fuji 子どもの家バンビーノの森」「森のようちえん まるたんぼう すぎぼっくり」「野遊び保育みつけ」「森のようちえん ピッコロ」「野外保育ゆたか」「特定非営利活動法人 Akita コドモの森 グーグルム」「自然育児 森のわらべ多治見園」「森のようちえん こころね」「森のようちえん てくてく」「山の学び舎はらぺこ」に通園している子ども（年少 63 名・年中 72 名・年長 56 名）をもつ保護者 209 名を対象に、郵送法（自記式アンケートを郵送により配布・回収）と Web によるアンケートの併用（配布数 182 通、回収数 110 通、回収率 60.4%+Web によるアンケート 99 名）に調査を依頼した。アンケートは、日常通園型の設立 6 年以上、園児 20 名以上の森のようちえんを選定し依頼した。その理由として、森のようちえんとしての保育が確立し安定していること、20 名以上の園児数を確保していることで、集団としての子どもの育ちが見込めることからである。

### 2.2 調査時期

2020 年 3 月に自記式アンケートを各園に郵送し、2020 年 3 月～7 月に回収した。また、Web によるアンケートも同時期に行った。

### 2.3 分析方法

本研究でのアンケートは、NPO 法人ネイチャーマジック森のようちえんさんぼみち 野澤俊索理事長と共同で作成したものである。質問項目は、ベネッセ教育総合研究所（2016）「幼児期から小学校 1 年生の家庭教育調査 縦断調査 第 5 回幼児の生活アンケート（1995 年より 5 年ごとに実施している 5 回目 2015 年の調査）」の「第 1 節 生活リズム」「第 2 節 習い事」「第 5 節 幼児の遊び」「第 6 節 幼児の発達状況」から採用し、表現に若干の変更を加えたものに、森のようちえんならではの質問項目を加えて作成した。子どもの生活の様子に関する項目は、「大変思う：4 点」「少し思う：3 点」「あまり思わない：2 点」「ほとんど思わない：1 点」の 4 件法で回答を求めた。森のようちえんの結果との比較対象として、前述のベネッセの保護者アンケート（調査地域：日本全国、対象：年少児から小学校 1 年生までの縦断調査に同意し、調査に中断することなく継続して参加した母親、サンプル数：年少 1500、年中 1460、年長 1074、調査時期：年少児 2012 年、年中児 2013 年、年長児 2014 年）の結果を用いた。以後、森のようちえんとの比較対象として「既存園」と記述する。

## 2.4 倫理的配慮

アンケートの実施に際して、NPO 法人ネイチャーマジック森のようちえんさんぽみち 野澤俊索理事長に研究の趣旨や個人情報の遵守などを説明し、内容を共同で検討し承認を得た。アンケートには、調査の目的・倫理的配慮を記して無記名とし、回答はコンピュータで統計的に処理され個人が特定されることはないこと、回答しづらい項目については、「答えられない」の選択肢を設けたことを明記した。

## 3. 結果と考察

### 3.1 性別

森のようちえんに通う子どもたちの性別の比率を示したものが図1である。男児が59.6%、女児が40.4%と男児の割合が高く、男女の比率がおおむね3:2であった。今回の調査に協力いただいた家庭の子どもたちの性差に偏りがあった可能性もあるが、男児の保護者の方が、子どもを森のようちえんに入園させたいと考える傾向にあるといえる。

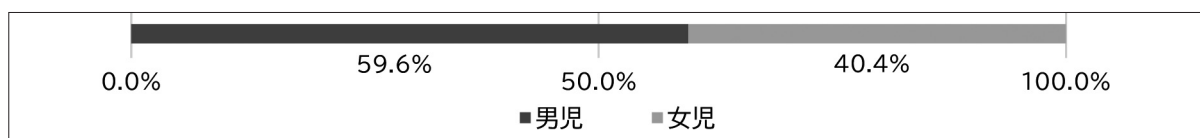


図1 性別

### 3.2 睡眠習慣

森のようちえんと既存園の子どもたちの起床時刻、就寝時刻、就寝時間を比較したものが表1である。

表1 睡眠習慣の比較

	森のようちえん	既存園
起床時刻	6時57分	7時05分
就寝時刻	20時49分	21時04分
就寝時間	10時間8分	10時間1分

森のようちえんの子どもは、既存園と比較して起床時刻、就寝時刻ともに早く、就寝時間が7分長く、早寝早起きで健康的な生活を送っている。平日「21時頃までに就寝」する割合が、森のようちえんは78.8%であるのに対し既存園は52.2%、「22時以降に就寝」する割合は、「森のようちえん」が5.8%であるのに対して、「既存の幼稚園」が11.1%、「既存の保育園」が40.5%であった。森のようちえんの子どもたちは、日中に屋外での活動を十分に行い、早く就寝することで体力を回復し、次の日の活動に向かう習慣を身につけている。

### 3.3 食事習慣

森のようちえんの子どもが、毎朝必ず朝食を食べる割合は94.2%で、平成27年の厚生労働省の「乳幼児栄養調査」の結果93.3%とほぼ同等の結果であった。一方、5.8%の子どもが朝食を摂らず森で活動する日があることは課題である。平日の夕食時刻で一番多かったのが、森のようちえんは「18時頃」39.6%、既存園は「19時頃」26.4%、夕食時刻の平均も、森のようちえんが18時22分、既存園が18時29分と森のようちえんの子どもは、就寝時刻と同様に夕食時刻も早い割合が高かった。図2は、平日の朝食・夕食状況を既存園と比較したものである。

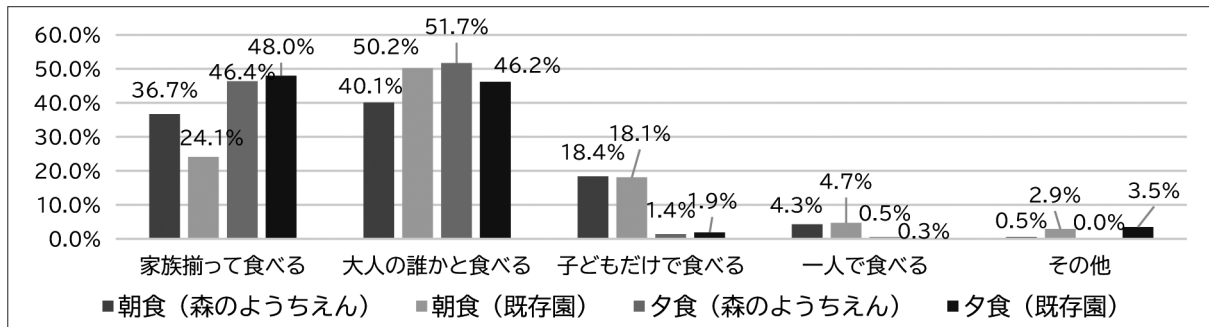


図2 平日の食事状況

森のようちえんも既存園も朝食は70%以上、夕食は90%以上が大人と食べているが、朝食は「子どもだけで食べる」がどちらも18%を超えていた。具体的には、森のようちえんの平日の朝食状況は、1位が「大人の誰かと食べる」40.1%、2位が「家族揃って食べる」36.7%、3位「子どもだけで食べる」18.4%であった。森のようちえんの子どもは、76.7%が大人と一緒に食卓を囲む共有時間を持ち登園している。一方で、「一人で食べる」孤食の子どもも4.3%いる。平日の夕食の状況は、1位が「大人の家族の誰かと食べる」51.7%、2位が「家族揃って食べる」46.4%で、98%以上の子どもは、大人と一緒に食べるという結果であった。朝食の共食状況は、既存園より森のようちえんのほうが「家族揃って食べる」割合が10ポイント以上高かったが、夕食はわずかながら既存園のほうが高くなっている。その要因として、既存園が「18時30分以降」に夕食を食べる割合が67.7%であるのに対して、森のようちえんは「18時頃」までに夕食を食べる割合が49.3%と約半数であり、18時までには保護者が仕事を終え家族全員揃って食事をするのは難しいと推測する。

### 3.4 通園習慣

一週間に森のようちえんに通う日数を表したものが図3である。調査した12園の森のようちえん（認定こども園3園、鳥取県の認証園1園、認可外・無認可園8園）は認可を受けた園だけでないため、認可外・無認可園では、通園日数は園の裁量で決められている。これらの園のうち「週5日通園」は6園、「週4日通園」は2園、3園は「3歳児は週3日、4歳以上は週5日」という通園スタイルであった。子どもたちが森のようちえんに通う日数は、「週5日」が61.8%、「週4日」が32.4%であった。森のようちえんのうち、認定こども園を除いた園と、既存園の滞在時間を比較すると、どちらも「5時間くらい」（森のようちえん47.3%、既存園50.2%）が一番多いが、2位は森のようちえんが「4時間くらい」23.4%、既存園は「6時間くらい」33.2%であった。園にいる平均時間は、森のようちえんが5時間10分、既存園は5時間20分と、森のようちえんの方が10分程度短い結果であった。

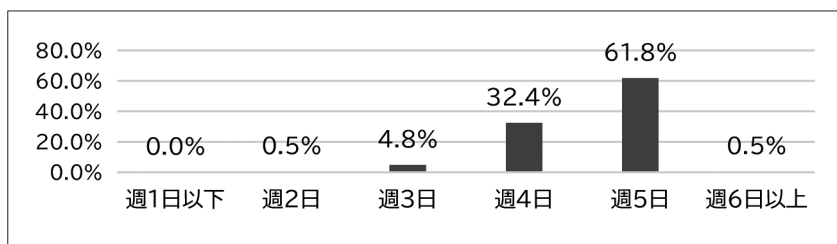


図3 一週間の通園日数

森のようちえんと家庭のライフバランスアンケート結果を平均すると、森のようちえんと家庭にいる時間の「バランスが取れている」と感じている保護者は84.5%であった。「もっと森のようちえんの時間が長いほうが良い」は12.6%、反対に「もっと家庭での時間が長いほうが良い」と捉えている保護者は2.4%であった。ライフバランスを通園日数ごとに比較したものが図4である。

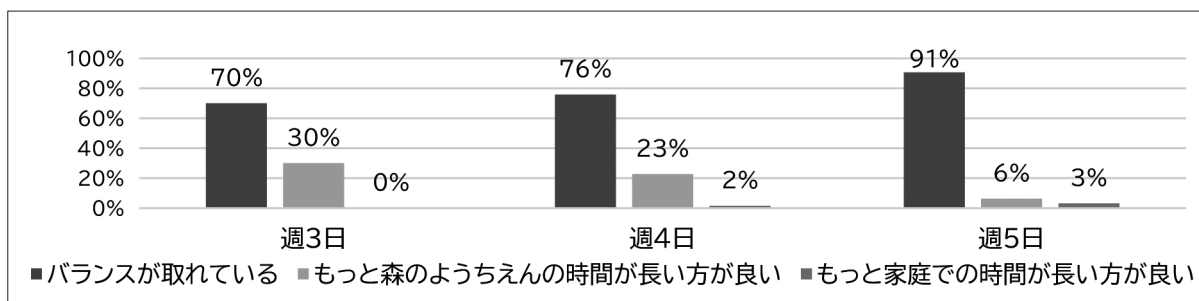


図4 家庭とようちえんとライフバランス

森のようちえんに「週3日」通っている子どもは70%が「バランスが取れている」と感じている一方、30%が「もっと森のようちえんの時間が長い方が良い」と感じている。「週4日」通園している子どもは、「バランスが取れている」と感じている割合が76%、「週5日」は91%と、通園日数が多いほど、保護者はバランスが取れていると感じている。そして、週5日通園している保護者の殆どは、現状の保育時間で満足しているという結果であった。

そう感じる理由として、「森で活動して、いい具合に疲れている。家では家でしかできない遊びができていと感じる。その時間も必要。」「友達と森にいる楽しさと、家族と遊ぶ時間、どちらも大切だと思うから。」との自由記述がみられた。一方、「保育時間を長くして欲しい」を選択した回答例は、「終わってからも遊びたいと言っているから。」といった子どもの遊び欲求や「頂けられる時間が長いと働いたりできる、またはもうちょっと何かできるなど。」といった保護者の行動欲求に関する内容もみられた。また、「家庭での時間を長くして欲しい」を選択した回答例は、「平日はなかなか一緒に遊べる時間を長くとれず、母としてももっと関わってあげたいと感じることがある。」「帰宅後眠そうにしていることが多いので、疲れているんだと思うことがあるため。」といった記述がみられた。

## 3.5 家庭での遊びの習慣

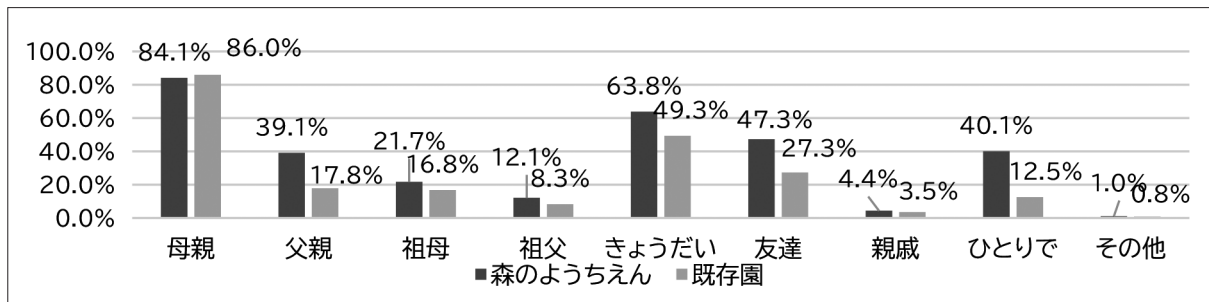


図5 平日家庭で一緒に遊ぶ人

平日によちえん以外で遊ぶ人（複数回答可）を既存園と比較したものが図5である。どちらも「母親」が一番多く、森のようちえん84.1%は、既存園86.0%と大きな差は認められなかった。森のようちえんの特徴として、既存園より20ポイント以上高かった項目は、「父親」39.1%、「友達」47.3%、「ひとりで」40.1%であった。平日に40%近くの父親が子どもと遊ぶ時間を確保しており、育児への父親参加の割合が高いといえる。「友達」が高かった理由として、既存園は近隣の子どもの家が通園しているのに対し、森のようちえんでは保護者が送迎することが多く、降園の際そのまま友達の家に行く機会も多いと推測する。一方、「ひとりで」遊ぶ子どもも40%おり、園で友達と十分に体を動かして遊んだ後は、ひとりで自分のペースで遊び、静と動の遊びの切り替えを行っていると考えられる。「母親」以外のすべての項目で森のようちえんの方が割合が高く、森のようちえんの子どもは多様な人との関わりの中で育っている。

森のようちえんと既存園の子どもが家庭でおこなう遊びを比較したものが図6である。

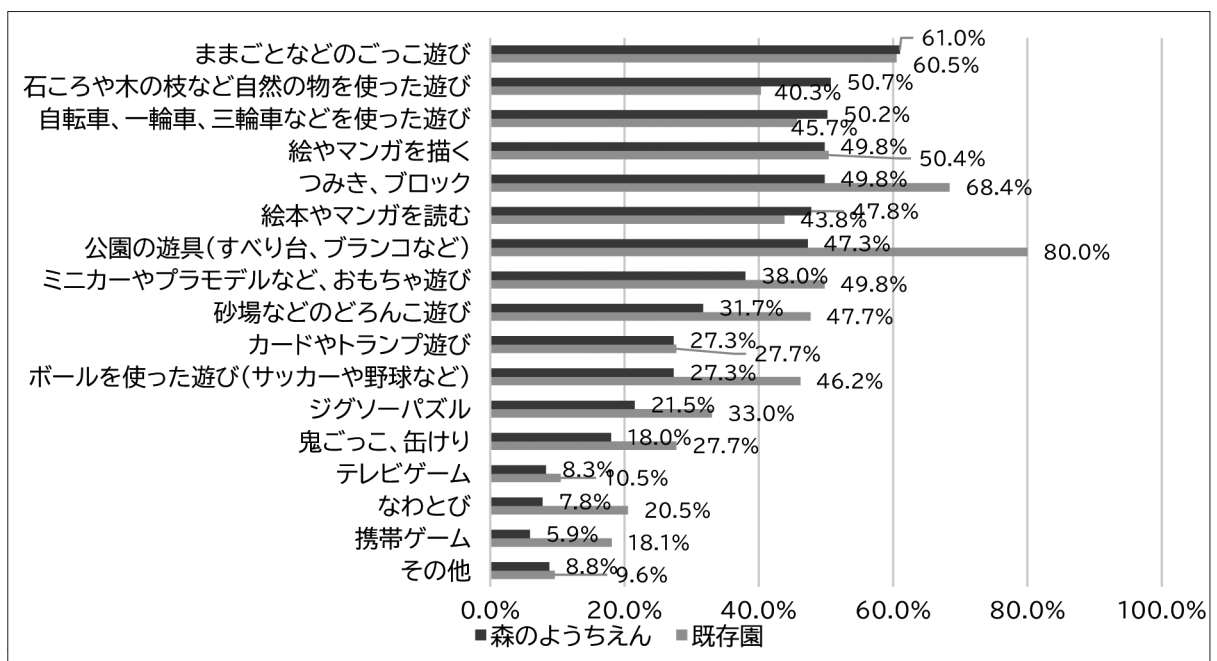


図6 家庭での遊びの内容

森のようちえんで高かった項目は、1位「ままごと」61.0%、2位「石ころや木の枝など自然のものを使った遊び」50.7%、3位「自転車、一輪車、三輪車などを使った遊び」50.2%であった。特に、10ポイント以上高かった遊びは、「石ころや木の枝など自然のものを使った遊び」であった。既成の玩具ではなく、自然



物を工夫して道具として利用したり、見立て遊びの素材として用いる様子は、森でもよく見られ、家庭でも親しみのある遊びをしているという結果であった。一方、森のようちえんで高かった上位3項目と「絵本やマンガを読む」以外の遊びは、すべて既存園のほうが割合が高く、森のようちえんの子どもは遊びの種類が少ない傾向にある。特に10ポイント以上低かった遊びとして、「つみき、ブロック」「公園の遊具（すべり台、ブランコなど）」「ミニカーやプラモデルなど、おもちゃ遊び」「砂場などのどろんこ遊び」「ボールを使った遊び（サッカーや野球など）」「ジグソーパズル」「鬼ごっこ、缶けり」「なわとび」「携帯ゲーム」と、「砂場などのどろんこ遊び」以外は、森ではほとんど行わない遊具や玩具を使った遊びである。森で経験することの少ない遊びは、家庭においても遊ぶ機会が少なく、既成の遊具を使って遊ぶより応答性、応用性のある自然素材を見つけ、試行錯誤しながら考えて遊ぶことに興味を持っている子どもたちであるといえる。一方、自然素材でも工夫することで多様な遊びはできるが、「つみき、ブロック」といった決まった型の構成遊びや、「ボール」「なわとび」などの道具を使った巧緻性や運動能力を育む遊び、「ボールを使った遊び（サッカーや野球など）」「鬼ごっこ、缶けり」といったルールのある集団遊びの経験が少ないこと、遊びの多様性に欠けることが明らかとなった。

### 3.6 習い事の変化と内容

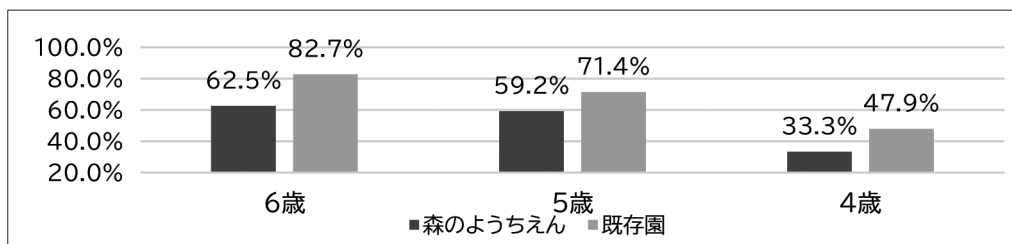


図8 習い事をしている年齢ごとの割合

年齢ごとに習い事をしている割合を既存園と比較したグラフが図8である。森のようちえんの子どもは、習い事をしている子どもとしていない子どもが50%ずつと半数であり、年齢ごとに分けると、「4歳」33.3%、「5歳」59.2%、「6歳」62.5%と、年齢が上がるほどに習い事をしている割合は上昇し、特に5歳以上で急激に高まっている。既存園の子どもと比較すると、どの年齢も既存園のほうが割合が高く、6歳では20ポイント以上の差が認められた。一週間の習い事の総時間は、約半数が習い事をしていないため「0分」が一番多いが、習い事をしている子どもで一番多いのが「1時間くらい」22.7%、2位が「2時間くらい」9.2%であった。90%以上の子どもが1週間に費やす習い事の時間は2時間以下であった。子どもたちが行っている習い事の種類を複数回答可で集計したものが図9である。

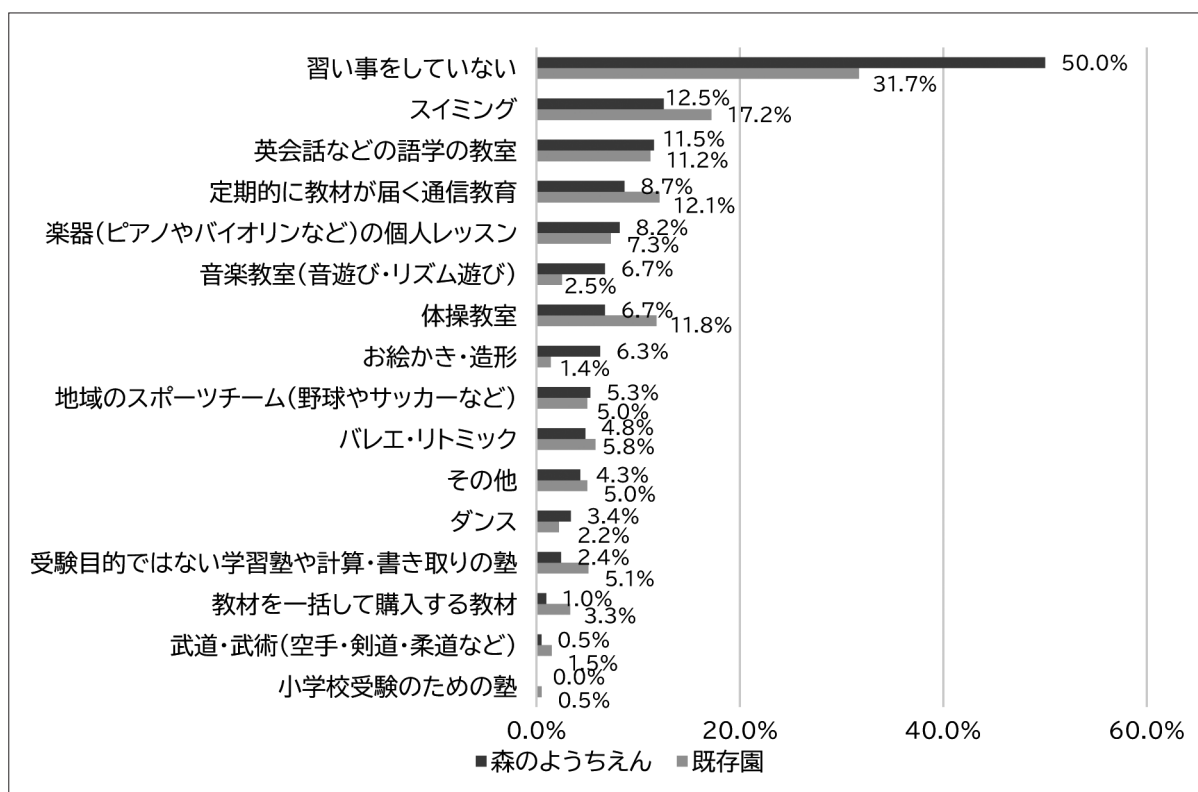


図9 習い事の種類

一番多かった「習い事をしていない」は、森のようちえんは50.0%、既存園は31.7%と森のようちえんの方が18ポイント以上低い結果であった。習い事で1位だったのは、「スイミング」12.5%、2位は「英会話などの語学の教室」11.5%、3位「定期的に教材が届く通信教育」8.7%と、割合は違うものの、習い事の上位の項目は既存園と概ね同じであった。既存園と比較し3ポイント以上少なかった習い事は、運動に関する「スイミング」「体操教室」と「定期的に教材が届く通信教育」であった。一方、3ポイント以上多かった習い事は、「音楽教育(音遊び・リズム遊び)」「お絵かき・造形」といった森で経験する機会の少ない表現活動であった。

### 3.7 学びに向かう力の育ち

子どもの生活の様子についての問いを、《生活習慣》と非認知能力である《自己主張》《自己抑制》《協調性》《がんばる力》について、学年ごとに既存園と比較したものが、以下の図10～図27である。

《生活習慣》

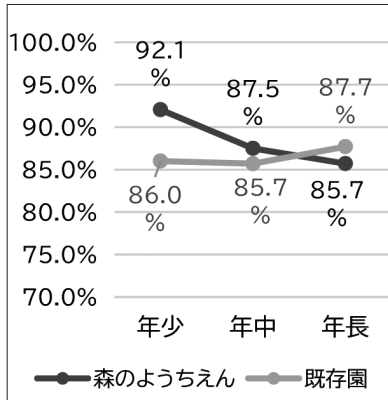


図10 夜決まった時間に寝ることができる

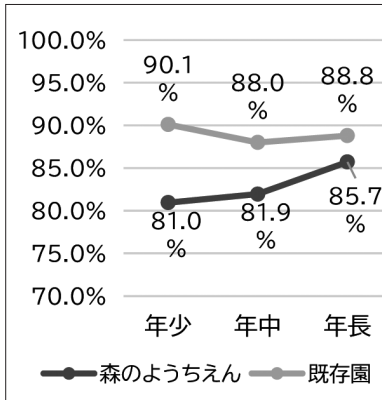


図11 周りの人に「おはよう」「さよなら」「ありがとう」などの挨拶やお礼を言える

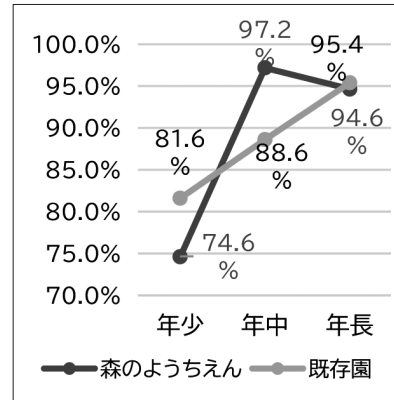


図12 一人でトイレの排泄、後始末ができる

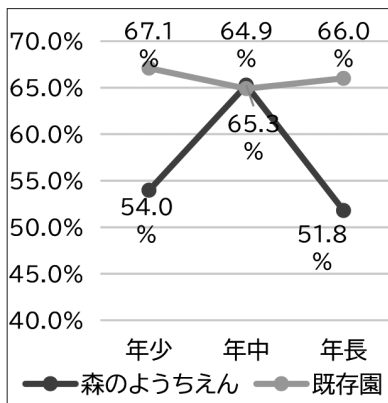


図13 家で遊んだ後片付けができる

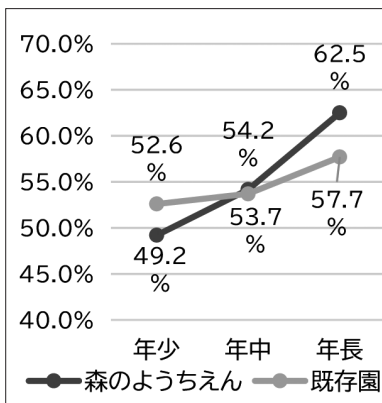


図14 好き嫌がなく食事ができる

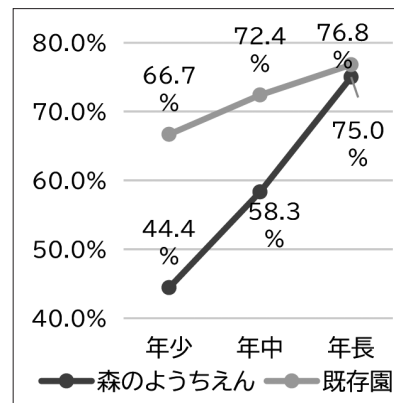


図15 脱いだ服を自分でたためる

基本的な生活習慣として、森のようちえん、既存園の子どもとも就寝、挨拶、排泄に関する項目は概ね80%以上が身につけている一方で、片付けや好き嫌いのない食事は60%台以下と幼児期に必要なものの、身につけることが難しい習慣である。森のようちえんの子どもは、年少の段階では「夜、決まった時間に寝ることができる」以外のすべての項目で、既存園より生活習慣が身につけておらず、特に「家で遊んだ後、片付けができる」「脱いだ服を自分でたためる」では、10ポイント以上の差が認められた。年中になると、「一人でトイレの排泄、後始末ができる」「家で遊んだ後、片付けができる」「好き嫌がなく食事ができる」の3項目で既存園と概ね同程度の結果となり、特に排泄後の後始末は、年中で20ポイント以上増加している。森の生活ではトイレ以外で排泄することもあり、保育者に援助してもらうことが難しく自立が必要不可欠で急速に身につくと考えられる。年長で既存園よりも身につけているのは、「好き嫌がなく食事ができる」1項目で、森での野外調理などで、苦手なものも自分たちで料理し楽しんで食べる経験などを通し身につくと推測する。年少では既存園よりも生活習慣が身につけていない子どもが多かったが、2年間で成長

し年長では4項目で概ね既存園の子どもと同程度の結果となった。一方、「家で遊んだ後、片付けができる」では、年中で既存園と同程度になるが、年長では14ポイント以上低く、森では遊んだ後に元あった場所に片付けるという経験が少ないことが影響していると推測する。また、「周りの人に「おはよう」「さようなら」「ありがとう」などの挨拶やお礼を言える」が、全学年で既存園よりも低いことも森のようちえんの子どもの課題であるといえる。

### 《自己主張》

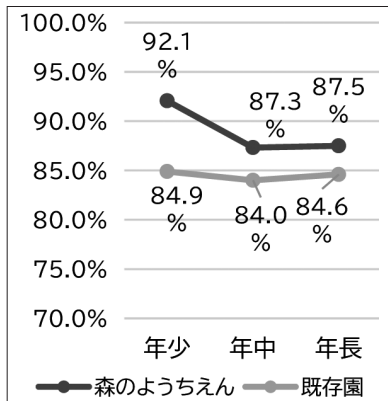


図 16 困ったことがあったら、周りの人に助けを求められることができる

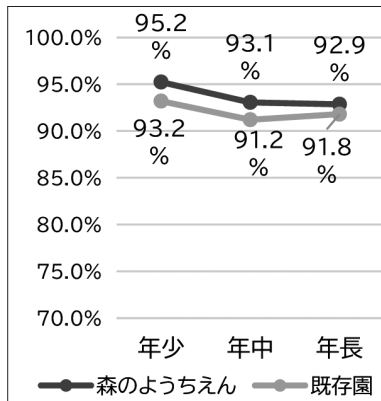


図 17 自分が何をしたいか言える

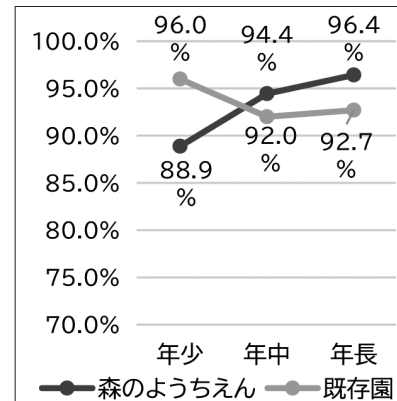


図 18 欲しいもの、して欲しいことを大人に頼める

「自己主張」する力は、森のようちえん、既存園ともにすべての学年で80%以上達成できている力である。森のようちえんの年少では、「困ったことがあったら周りの人に助けを求められることができる」力が既存園と比較し7ポイント以上高く、森の環境は子どものために創られたものではないため、問題解決に困る場面も多く、助けを求める力は特に年少児にとって不可欠な力といえるだろう。一方、「欲しい物、してほしいことを大人に頼める力」は、年少児では既存園のほうが優れているが、年中以降は逆転しており、年長ではすべての項目で森のようちえんのほうが優れている結果であった。

### 《協調性》

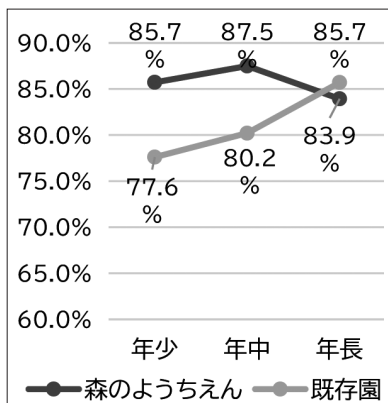


図 19 人に自分の気持ちを伝えたり相手の意見を聞いたりすることができる

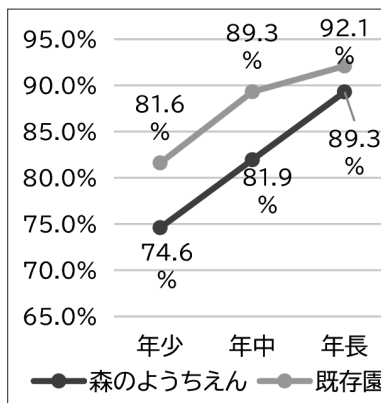


図 20 友達とけんかしても謝るなどして仲直りができる

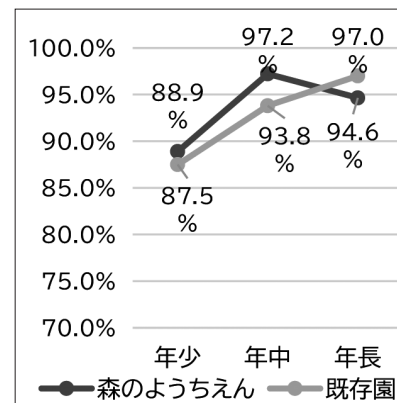


図 21 遊びなどで友達と協力することができる

「協調性」は、既存園、森のようちえんとともに、すべての学年で70%以上の子どもが身につけている力である。森のようちえんは、年少、年中では「自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞く力」「遊びなどで友達と協力することができる」力に優れている。一方で、「けんかしても謝るなど仲直りできる力」は、すべての学年で既存園のほうが高い結果であった。また、年長では「協調性」のすべての項目で3ポイント以下の差であるが既存園の方が高かった。「協調性」は、既存園では学年ごとに緩やかに成長している項目であるが、森のようちえんでは「自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞く力」「遊びなどで友達と協力することができる」では、年中が最高値で年長になると下降している。年長の協調性とけんかの際に謝るといった相手の思いを尊重し、自分の思いに折り合いをつけることが課題であると言える。

《自己抑制》

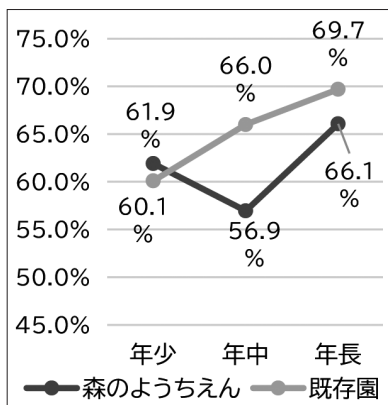


図 22 夢中になっていることでも時間が来れば次のことに移ることができる

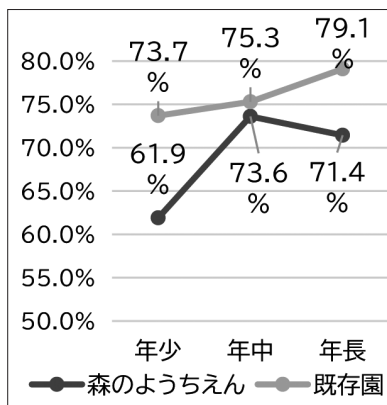


図 23 人の話が終わるまで静かに聞くことができる

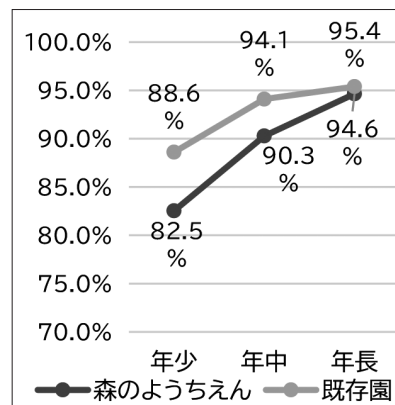


図 24 ルールを守りながら遊べる

「自己抑制」力について、森のようちえん、既存園ともに「ルールを守りながら遊べる」といった社会性に関する集団での自己抑制は80%以上ができていると高い評価であった。一方で、「夢中になっていることでも、時間が来れば次のことに移ることができる」(60%台以下)、「人の話が終わるまで静かに聞くことができる」(70%台以下)と個人での自己抑制に関しては、成長に個人差がみられた。森のようちえん、既存園を比較すると、「夢中になっていることでも、時間が来れば次のことに移ることができる」の年少のみ森のようちえんの方が高かったが、それ以外すべての学年や項目で既存園の方が高い結果であった。「夢中になっていることでも、時間が来れば、次のことに移ることができる」や「ルールを守りながら遊べる」力は年長で増加し、既存園との差は減少している。一方で、「人の話が終わるまで静かに聞くことができる」力は、年中で同程度になるものの、年長で7ポイント以上の差が認められた項目である。これは、森のようちえんが子どもの主体性と自己発揮できることを尊重し、時間の制限をできるだけ設けず興味のある遊びに没入する時間と空間の保障をすることでの学びを大切にしていることが関係していると推測する。

《がんばる力》

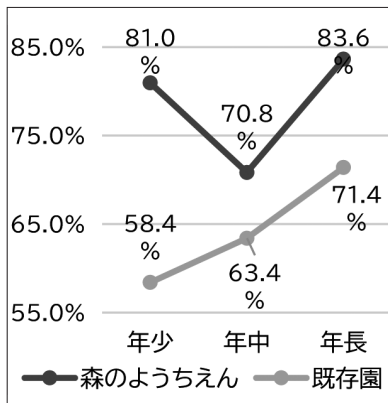


図 25 ものごとをあきらめずに挑戦することができる

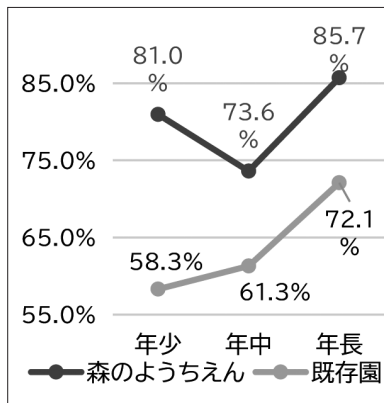


図 26 自分でしたいことが上手くいかないときでも工夫して達成しようとする

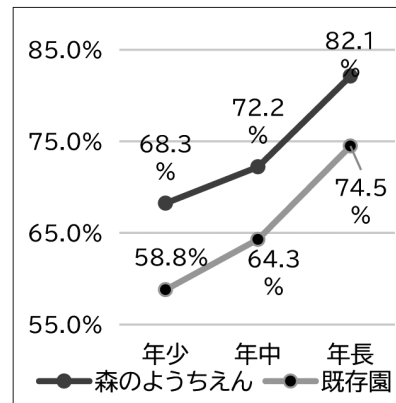


図 27 一度始めたことは最後までやり通せる

「がんばる力」は、既存園では他の力より個人差が大きく、年少児では3項目ともに50%台であるが、学年を経るごとに上昇する力である。この力は、すべての学年、項目で森のようちえんの方が身につけている。特に年少では「ものごとをあきらめずに、挑戦することができる」「自分でしたいことが上手くいかないときでも、工夫して達成しようとする」では、20ポイント以上の差が認められ、年長でも10ポイント以上森のようちえんの方が高い傾向にある。既存園では、保育室という安心できる生活環境の中で年少として保育者から援助してもらえることも、森では年少の段階から大きな荷物を持つての移動や雨や寒さなどの自然環境の変化への対応力や身の回りの困難に対する自己解決能力が求められ、人に頼らず工夫してやり遂げる「がんばる力」が身につくと考えられる。この「がんばる力」は、年中で減少傾向が見られるものの、年長で増加している。年中で減少する要因について検証が必要であるが、「がんばる力」は、森のようちえんの子どもが既存園より優れた力であると言える。

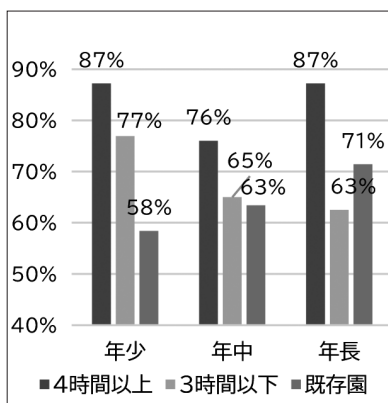


図 28 ものごとをあきらめずに挑戦することができる

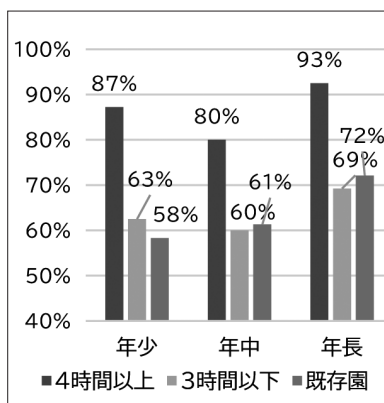


図 29 自分でしたいことが上手くいかないときでも工夫して達成しようとする

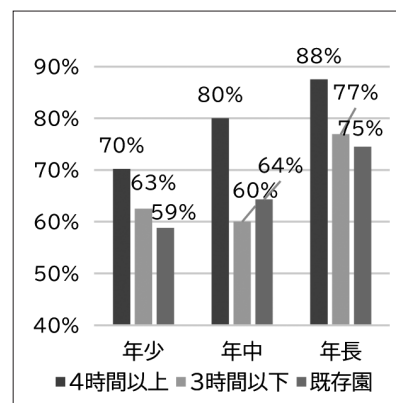


図 30 一度始めたことは最後までやり通せる

「がんばる力」の3項目を、森にいる時間の長さにより、長時間群（4時間以上）と短時間群（3時間以下）、既存園に分け、自然環境に関わる時間の長さが「がんばる力」に与える影響を検証した結果が、図28、29、30である。4時間以上（「ようちえんにいる間はずっと森にいる」を含む）と3時間以下に分類した理

由として、幼稚園教育要領に「幼稚園の1日の教育課程に係る教育時間は、4時間を標準とすること」と規定されており、今回のアンケート結果の99%が在園時間4時間以上であったため、子どもたちの主としての生活が森（自然環境）の中で行われているかを判断するためである。すべての結果で、長時間群が最高値であり「一度始めたことは最後までやり通せる」の年少以外、長時間群と短時間群に10ポイント以上の差が認められた。特に「自分でしたいことが上手いいかないときでも、工夫して達成しようとすることができる」では、すべての学年で20ポイント以上の差が認められた。既存園と短時間群の比較では、「ものごとをあきらめずに、挑戦することができる」の短時間群の年少が15ポイント高い結果であったが、それ以外の学年や項目では長時間群のような大きな差は認められず、図28の年長、図29の年中、年長、図30の年中のように既存園の方が高い項目もみられた。「がんばる力」の育ちには、主としての活動場所が森などの自然環境で、その環境と4時間以上の関わりが必要であることが示唆された。

## 4. まとめ

### 4.1 森のようちえんの子ども像

今回のアンケートでは、森のようちえんの子ども像として、男女の比率が3:2と男児の割合が高く、男児の保護者の方が森のようちえんに入園させたいと考える傾向にある。21時前に寝て7時に起き、朝食、夕食ともに家族と食べ、夕食は約半数が18時頃までに食べるという早寝早起きの健康的な生活を送っている。一方で、朝食の4.3%、夕食の0.5%が孤食で、5.8%が朝食を摂らず登園することがある。通園日数は園により2日～6日（2日、6日は各1名）と違いがみられるが、通園日数が多いほど、森のようちえんと家庭での時間のバランスが取れていると保護者は感じている。降園後は、家庭でも森のようちえんで普段から遊んでいるままごとや自然物を使った遊びをする子どもが多く、次いで自転車遊び、絵を描くと続くが、構成遊びや、道具を使った遊び、ルールのある集団遊びが既存園と比較して少なく、多様な遊び経験に欠ける子どももいる。また、習い事は約半数の子どもが行っていない。

### 4.2 多様な人との関わり

森のようちえんの子どもたちは、平日家庭で一緒に遊ぶ人が、「父親」「友だち」で20ポイント以上高く、「父親」の育児参加率の高さが際立っており、子育てを両親協働でおこなう傾向が高かった。また、既存園より「祖母」「祖父」「きょうだい」「親戚」といったすべての人と一緒に遊んでおり、森のようちえんの子どもは、多様な人との関わりの中で関係論的に育っている。一方で40%の子どもは「ひとりで」遊ぶ時間も持ち、人と関わることで学びと自身の興味に向き合い自己との対話からの学びの両方の時間を有しているといえる。

### 4.3 学びに向かう力の育ちと必要な環境

《生活習慣》や非認知能力の《自己主張》《協調性》《自己抑制》《がんばる力》といった学びに向かう力のうち、項目により上下の差は認められるものの年長の段階での育ちを能力ごとにまとめた結果は、以下の通りである。《生活習慣》は概ね既存園と同程度、《自己主張》はすべての項目で森のようちえんの方が身についており、その差は4ポイント以内であった。《協調性》はすべての項目で既存園の方が高く、その差は3ポイント以内、《自己抑制》もすべての項目で既存園の方が高く、その差は0.8～7.7ポイントであった。

《がんばる力》はすべての項目で森のようちえんの方が身につけており、その差は7.6～13.6ポイントと大きな差が認められた。森のようちえんの子どもの育ちの特性として、《がんばる力》《自己主張》に優れ、《協調性》《自己抑制》に弱さがあることが示唆された。「幼児期に「ものごとを諦めずに挑戦することができる」といった「がんばる力」が高い子どもほど、小学校低学年で「大人に言われなくても自分から進んで勉強する」などの学習態度や「がんばる力」も引き続き高い傾向（ベネッセ 2019）にあり、「園で「遊びこむ経験」が多く、自由に遊べる環境が充実し、保育者の受容的な関わりがあるほど、学びに向かう力が高い。」（ベネッセ 2016）との検証がなされている。森のようちえんでの遊び込む時間と空間の保障と保育者の「子どもの力を信じ、子ども自身で考え行動できる雰囲気をつくる」（前述の連盟のHP「森のようちえんが大切にしたいこと」）といった見守る姿勢が、《がんばる力》を育てているといえるであろう。

この《がんばる力》は、自然環境に関わる時間に影響を受け、森（自然）を主たる生活の場所とし1日4時間以上身を置く場合に育まれることが明らかとなった。この4時間以上、自然環境の中に身を置いているとした子どもは、園舎のない無認可、認可外の園の子どもが多かった。園舎がないことで、年少の段階から大きな荷物を背負って森の中を移動し、絶対的な大自然の力である暑さ寒さや風雨、意図せざる偶然に対応し、遊び込むに十分な圧倒的な自由と多様性が保障される代わりに、結果責任はすべて自身が引き受けるといった逃げ場のない自然環境に身を置き続けることが《がんばる力》の育ちにつながっていると推察する。

#### 4.4 森のようちえんの子どもの課題

今回の研究から、森のようちえんの子どもの育ちに以下の課題があることが明らかとなった。非認知能力の《協調性》《自己抑制》は、4ポイント以下であったがすべての項目で既存園より低い結果であった。また、卒園前の年長で5ポイント以上低かった項目は、「家で遊んだ後、片付けができる《生活習慣》」「人の話が終わるまで静かに聞くことができる《自己抑制》」の2項目であった。そして、年中よりも年長で下降している項目が、《生活習慣》の排泄、後片付け、《協調性》の伝えたり聞く力、友達との協力、《自己抑制》の終わりまで話を聞く力の5項目であった。今回の研究では学年ごとに対象者が違うため、各学年の子どもの育ちの特徴である可能性が排除できないが、課題となった項目に関する経験値を増やすなどの意識的な関わりが必要であろう。森のようちえんの子どもは、「やりたくないけどやらなければならないこと」の中で、個人的に《がんばる力》は身につけているが、最後まで人の話を聞くや、けんかして謝るなど相手に合わせて我慢し気持ちを収める力、周りの人が気持ちよく使えるために片づけるなど、周囲の状況や人の気持ちを汲み取り、自身の気持ちを調整、抑制して相手に合わせる力に課題がみられた。この力は、好きな友達と主体的に選択した遊びをしている環境だけでは十分な育ちができるとはいえない。意見の合わない友達との関わりや集団活動などの制限や枠組みの中で、相手を思いやり自己調整することで身につけていく。その経験のための環境には、他児の遊びに興味を持ち自身の遊びと繋げられるような遊びの情報共有の場面、他児への共感や応援の場面、他児との目的の共有や協働での課題解決の場面、目的を達成できた喜びを共有する場面等を設定することが重要である。森のようちえんの保育の特徴である自然の力とそこに関わる子どもの自ら育つ力を信じ、主体性を尊重する見守る保育の良さに、意図性を持った設定場面を加えることで、子どもたちのより良い育ちに繋がると考える。

本研究では、森のようちえんの子どもの生活習慣と学びに向かう非認知能力の育ちの特徴が明らかとなった。しかし、各学年一斉に調査を行ったため、森のようちえんの子どもの育ちの過程ではなく、その学年の育ちの特徴を明らかにするに留まった。今後は、規模を拡大して森のようちえん全体に調査対象を広げ、継続した縦断調査を行うことで、育ちの変容を明らかにしていきたい。



## 謝辞

本研究を行うに当たり、アンケートを協同で作成していただいた森のようちえんさんぼみち NPO 法人ネイチャーマジック理事長 野澤俊索様に、心より感謝申し上げます。また、アンケートに快くご協力いただきました 12 園の森のようちえんの保護者の皆さまにも心よりお礼申し上げます。

## 【引用・参考文献】

- ・ベネッセ：幼児期から小学4年生の家庭教育調査・縦断調査  
[https://berd.benesse.jp/up\\_images/publicity/pressrelease\\_20190225\\_.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/publicity/pressrelease_20190225_.pdf), 2019.
- ・ベネッセ：園での経験と幼児の成長に関する調査 <https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=4940>, 2016.
- ・今村光章：森のようちえんとは何か:用語「森のようちえん」の検討と日本への紹介をめぐって, 環境教育 21(1), 59-67, 2011.
- ・今村光章：水谷亜由美：森のようちえんの理念の紹介:ドイツと日本における発展とその理念を手がかりに, 環境教育 21(1), pp68-75, 2011.
- ・水谷亜由美・今村光章：記述的エピソード法を用いた行事型森のようちえんの実践報告, 岐阜大学教育学部研究報告,教育実践研究 16, pp51-60, 2014.
- ・イングリッド・ミクリッツ:森の幼稚園—ドイツに学ぶ森と自然が育む教育—, 風鳴舎, 2018.
- ・梶浦恭子・西澤彩木：自然物を手にする幼児はどのような表現をするのか：幼児の行動記録を手がかりに, 名古屋学院大学論集. 人文・自然科学篇 53(2), pp125-138, 2017.
- ・木戸啓絵：ドイツのシュタイナー幼稚園における「森の幼稚園教育」の導入, 教育研究:青山学院大学教育学会紀要 (57), 21-37, 2013.
- ・菊田文夫・藁谷久雄・田中誉人・伊藤めぐみ：自然体験活動を基軸とする幼児教育の現状とその展望—森のようちえん全国調査の結果から—, 聖路加国際大学紀要 2, pp72-77, 2016.
- ・倉橋惣三：倉橋惣三選集 第2巻, フレーベル館, 1965.
- ・文部科学省：幼稚園教育要領, 2017.
- ・中坪史典・久原有貴・中西さやか・境愛一郎・山元隆春・林よし恵・松本信吾・日切慶子・落合さゆり：アフォーダンスの視点から探る「森の幼稚園」カリキュラム—素朴な自然環境は保育実践に何をもたらすのか, 学部・附属学校共同研究紀要 (39), pp135-140, 2011.
- ・NPO 法人森のようちえん全国ネットワーク連盟, <http://morinoyouchien.org/>, 2021.1.28.
- ・大平一枝：子育てと教育の部屋 大きくなあれ 森のようちえん 長野県安曇野市に園舎のない幼稚園を訪ねて, かぞくのじかん 4, 婦人之友社, pp85-89, 2008.
- ・杉山浩之：「森のようちえん」の理念と研究課題, 広島文教女子大学紀要 48, pp13-27, 2013.
- ・リチャード・ループ/春日井晶子訳：あなたの子どもには自然が足りない, 早川書房, 2006.
- ・高橋多美子・高橋敏行：幼少期における自然体験の年代別比較と望ましい自然体験の在り方, 理科教育学研究 50(2), pp89-97, 2009.
- ・山口美和：「森のようちえん」をめぐるポリテイク—「春愁型自然保育」検討委員会の議事録分析を通して—, 東京大学大学院教育学研究科 基礎教育研究室紀要, 第42号, pp215-225, 2016.
- ・山口美和：「信州型自然保育認定制度」創設による幼児教育・保育の再定義, 日本教育学会大会研究発表要項 75(0), 312-313, 2017.
- ・吉田若葉・宮本慶子：自然環境と子どもの育ちに関する一考察—D 幼稚園・5歳児での実践(1), 北陸学院短期大学紀要 (40), pp173-196, 2008.

